

夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness are round about me, but judgment is from on high.
A fire goeth before him, and burneth up his enemies round about.
The heavens enlightened the world, and the earth and trembled.
The hills melted like wax at the presence of the Lord, at the presence of the Lord of the whole earth.
The heavens declare his righteousness, and all the people see his glory.



オーガストオフィシャルハンドブック
2006年新春号

P R E F A C E

こんにちは、オーガストです。
この度は、オーガストオフィシャルハンドブックをお手に
取って頂き、誠にありがとうございます。

新作『夜明け前より瑠璃色な』の発売から3ヶ月あまり。
現在開発室には、プレイして頂いた方々から届いた
何千通ものアンケート葉書が、大きな山を作っています。
(データ入力担当からは、嬉しい悲鳴が上がって
いました。)

この場を借りて、葉書をお送り頂いた方に厚く御礼申
し上げるとともに、「プレイはしたけど葉書は出していない」という方が
いらっしゃいましたら、是非お送り頂けますようお願い申し上げます。

現在オーガスト開発室は、若干名増員されたスタッフ
とともに、全スタッフ各々の作業に集中、技術の向上
にも余念がありません。その成果は、『夜明け前より瑠
璃色な』音楽集「Lunar Passport」を初め、これか
ら公開されるコンテンツでご確認頂けることと思いま
す。

次回作の企画も水面下では動き始めていますが、今
しばらくは、フィーナ姫を初めとする『夜明け前より瑠
璃色な』のキャラクターたちとの付き合いが続きそ
うです。

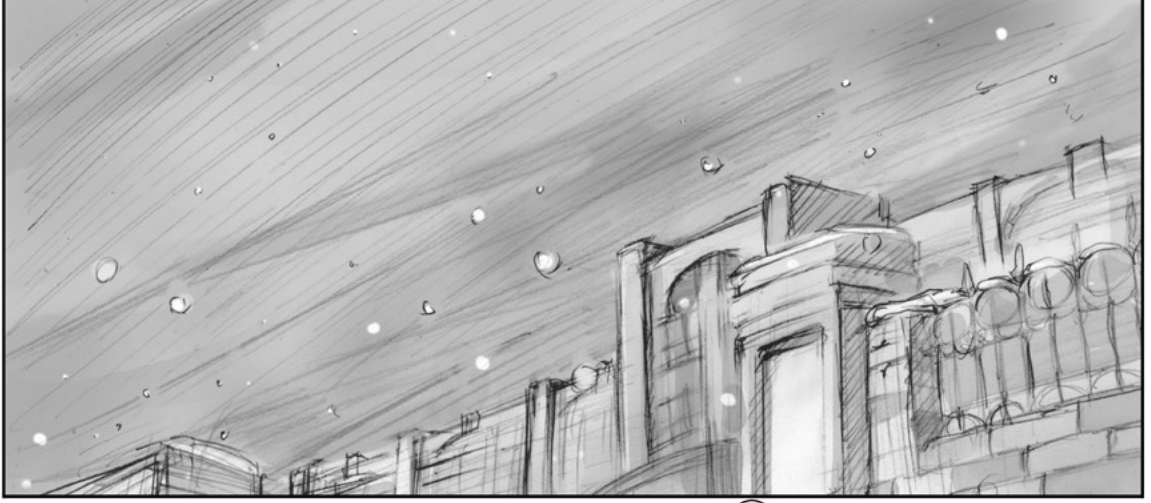
それでは、また後ほどあとがきでお会いしましょう。

2005年12月末 オーガスト

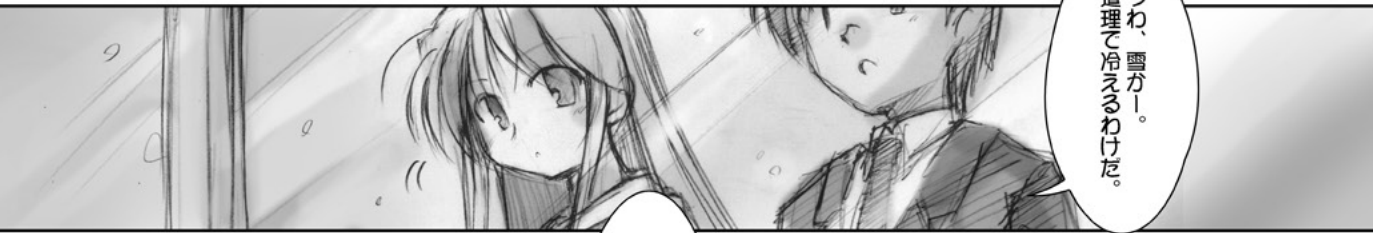
CONTENTS

- 3 べっかんこう描き下ろしマンガ
『雪の降る街』
- 7 瑠璃色ショートストーリー
『唄口』
- 10..... スタッフ対談
- 11..... あとがき

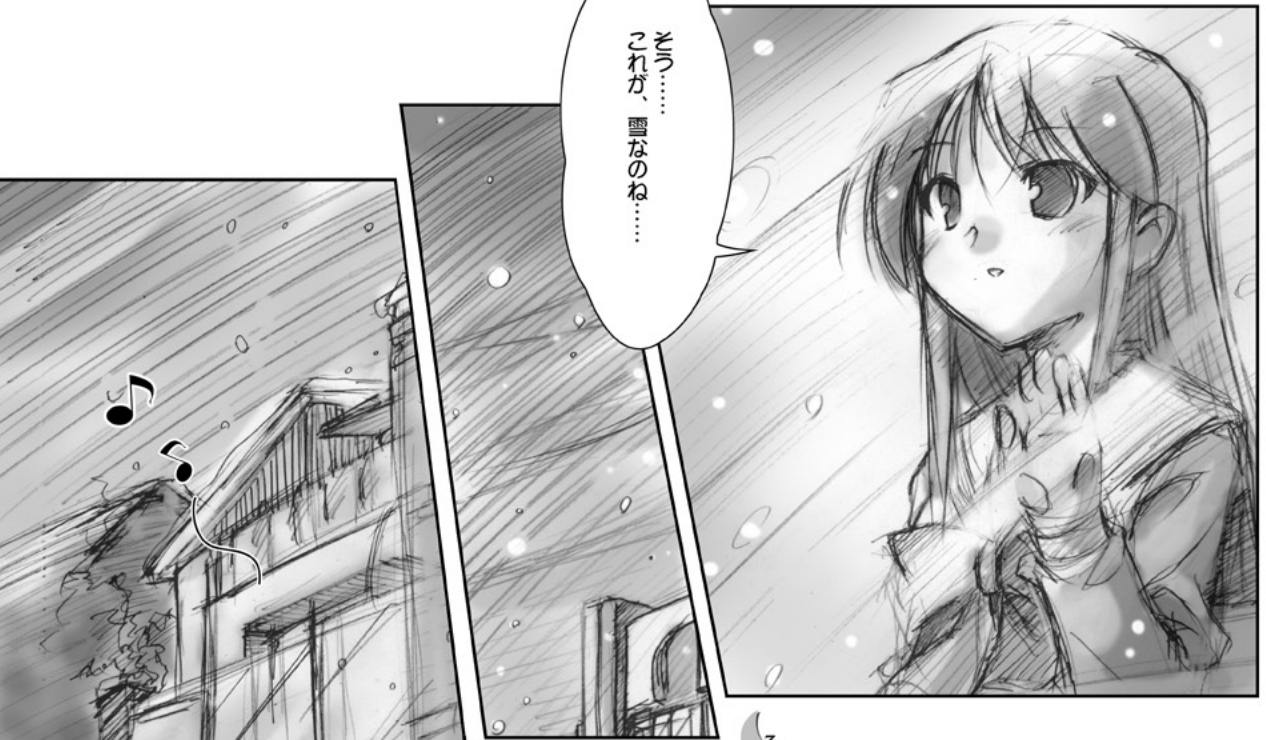




雪の降る街
べっかんこう



うわ、雪が！
道理で冷えるわけだ。



そう...
これが、雪なのね...



お帰りがさいませっ

たはいま、ミッ



おさま、見てください。
「キウサキですよ。」

ほかーん



雪がもつと種もつたり
「キウサルマヤ
カマウラも作るんです」



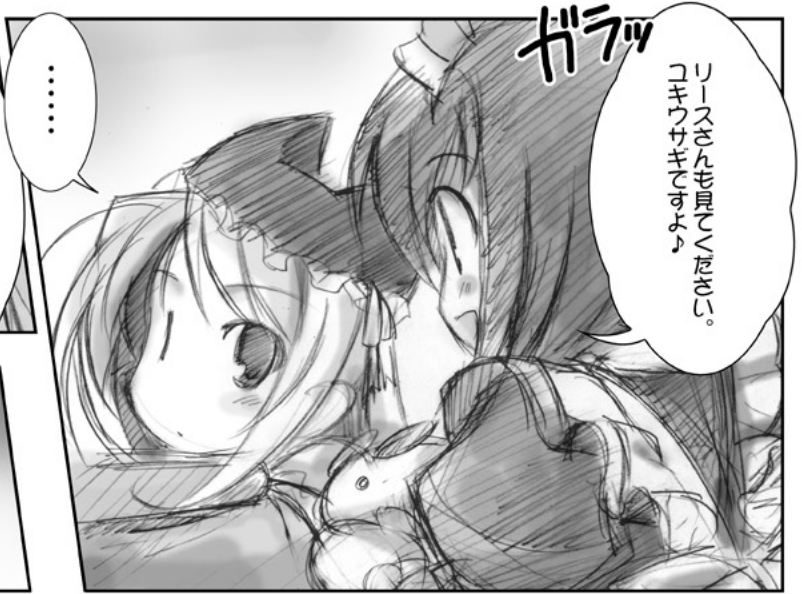
まき、可愛いわね ♡



おな-



きつと降れは良いけど……
今日はきつやぬすうだじ……
この分だと明日には
溶けちゃうかもな！





夜明け前の瑠璃色な

Copyright © 2011 Shogakukan. All rights reserved.
A fine print line of text at the bottom of the page, likely a copyright notice or publisher information.

瑠璃色ショートストーリー 唄口

内田ユウキ

フルートの軽やかな音色が川原に流れている。夕暮れも迫った7月のある日。

俺は麻衣の隣に転がり、眠るでもなく目を閉じていた。

こうして麻衣の練習に付き合うのは何度目なのか――

ふとそんな疑問が浮かんだが、答えは出す、すぐに頭の中から追い出した。

「ふう」

麻衣が一つ息をつく。

曲が終わった合図だ。

俺はのろのろと上半身を起こす。

「お疲れさま。上手くなったんじゃないか？」

「そう言えるほど、ちゃんと聞いてくれてたの？」

にぱっと笑いながら麻衣が言う。

「ちゃんとかどうかは分からないけど、上手くなったのは分かったよ」

「えへへ、本当かな」

はにかんだ表情からは、隠しようもなく嬉しさがにじんでいた。

「でもさ、そんなんでよく音出せるよなっ」

フルートの唄口を見ながら言う。(唄口＝息を

吹き込むところ)

金属のパイプに一枚鉄板を貼ってから穴を開けただけの構造。

それで澄んだ音が出るのだから、まったく不思議なものだ。

「吹いてみる？」

「音出せるかな？」

「試してみたら分かるって」

曖昧に頷き、麻衣から楽器を受け取る。

繊細な銀細工のような作りに、自然と手が震えた。

そんな俺の手を、麻衣が正しい持ち方に直してくれる。

「さ、ふうって」

「ふう」

恐る恐る息を吹き込んだフルートからは、そのまま「ふう」っと音がした。

出ないぞ、と目で訴える。

「角度を、こうして……」

麻衣が、俺の後ろから手を伸ばしてフルートをひねる。

「じゃ、もっかい」

軽く頷いて息を吸う……

「ああっ！ 間接キ―― スっ！」

「ええっ！？」

兄妹、同じ声を発して振り向く。

シンク口だったなら満点の動き。

「やほ〜い」

びしっと拳手する遠山。

「こ、こ、こんにちは、遠山先輩」

「なんだ、遠山か」



夜明け前の色づき

Copyright © 2013, Shueisha Inc. All rights reserved.
A light novel series by the author of the anime 'The World of Otome Games is Ending'.
The title and cover art are the property of the publisher.

「なんだ」とはなんですかっ！ 遠山さんの登場ですよ……むしろ爆誕？ 発生？」

「降臨をお願いします」

「ハハハ、わかっているなあ麻衣は」

胸を反らしてご満悦の遠山。

まあ、遠山の扱いは分かっているのだろう、同じ部活だし。

「それはそれとして……」

遠山が人差し指で麻衣のおでこをつつつく。

「白昼堂々とは……いやはや、風紀も乱れたものですナ」

「そそそ、そんなんじゃないですよ。や、やだなあ」

麻衣がバタバタと手を振って否定する。

「当たり前でしょ、兄妹なんだから」

しれっと言う遠山。

「あ……」

気の抜けた声を出して麻衣が俯く。

見る見るうちに、首筋が朱に染まった。

「もしかして、意識しちゃってた？」

いくぶん驚いた表情の遠山。

なんか嫌な予感が出て、俺は二人の間に割って入った。

「まあ待て、別にホラ、騒ぐほどのことじゃないだろ？」

「ふうむ」

遠山が眉間にしわを寄せる。

しばしの沈黙。

その間、麻衣はバツが悪そうに地面を見つめていた。

「んじや、やってみようっ！」

遠山が、持っていたクラリネットを組み立て、俺に突き出す。

「ええっ？」

当然のごとくたじろぐ俺。

「さあ来いっ！ 騒ぐほどのことでないのならっ！」

「すずい、と詰め寄ってくる遠山。」

「あ、いや、あの……遠山さん？」

「あああああああ」

「どうしたの？ できないの？ して下さいっ！」

なんか最後はちよつと違う。

「ぐ……」

遠山が俺の目をじつと見る。

「ま、勘弁してあげよっかな」

□元に猫みたいな笑みを浮かべて、遠山が一歩下がる。

「……すいませんでした。今後、発言には注意します」

「分かればよろしい。そなたらも公然と間接キスするのは避けるようにナ」

鼻息荒く遠山が言う。

「ふぉーほっほっほっほっ」

「あの、遠山先輩……」

悪は成敗した、とばかりに立ち去ろうとする遠山を麻衣が止める。

「わーってるって、別に意識してたワケじゃないんでしょ？」

「あ……」

ちらつと麻衣が俺を見て――

「はい……当たり前じゃないですか」

笑顔で答えた。

*

「すごいパワーだな、遠山は」

「うん……元気だよね」

どっしりとした疲労を感じて、俺たちは並んで土手に腰を下ろす。

いつの間にか夕闇は濃くなって、周囲が橙色に染められていた。

「驚いたな」

「え？ あ、うん」

俺の横顔を見ていた麻衣が、せわしげに視線を逸らす。

「ぜ、全然気にしてなかったね」

「まあ、家族だし」

「そうだよね」

「そうだな」

デクレスシンドがかかっているように小さくなる俺たちの声。

「……うん」

吹くような麻衣の返事を最後に、無音が訪れた。

川面を走り抜ける風が麻衣の髪を撫で、爽やかな香りを運ぶ。

横目に見た麻衣の表情は、かすかな憂いを帯びていた。

どうしてそんな顔をするのか。

答えが頭をよぎるが、すぐに消した。

(当たり前でしょ、兄妹なんだから)

遠山の言葉が脳裏をよぎる。

温もりを求める心も、胸を焼く焦燥も、俺た

夜明け前の色づき

Copyright © 2008 by Shogakukan. All rights reserved.
A fine print notice at the bottom of the page reads: "The text and illustrations are the property of Shogakukan. All rights reserved." The full notice can be found at the bottom of the page.

ちの間にはない。
あつてはならない。

昔、俺たちが交わした約束だ。

その象徴は今も麻衣の髪を結び、風に揺れている。

大丈夫。

仮に麻衣が崩れそうになったとしても、俺は揺らがない。

麻衣の幸せを考えれば、むしろそれは兄として当然の使命だ。

「ん？」

麻衣と視線が合う。

憂いは既に姿を隠し、にぱっと人懐こい笑顔が浮かんでいた。

「平気か？」

「なにが？」

「あ、いや」

自分の不安を麻衣に消してもらおうとしたことに気がついて、少し恥ずかしくなった。

「帰ろっか？」

視線を逸らせながら麻衣が言う。

俺の返事を待って、麻衣がフルートを片付け始めた。

夕日を照り返し再び唄口が光る。

「平気だ」

自分の口から、ぼつりと声が漏れていた。

麻衣がきょとんとした表情で俺を見る。

「なんでもないさ」

「実は、遠山先輩と間接キスしたかったのか？」

麻衣が唄口を俺に見せながら笑う。

からかっているような、試すような表情だった。

妙に大人びて見えて、胸の奥がきゅつとする。

「ま、まさか。なんで遠山と」

「ふん、明日先輩に言っちゃおっと。シヨックだろうな」

「ちよとまで、そういう話じゃなくって……」

「あはは、焦ってる焦ってる」

気持ち良さそうに笑う麻衣。

「あ、アホなこと言ってるんで、帰るぞ」

「お兄ちゃん」

麻衣が、わずかに強い語調で俺を呼び止める。

「私、お兄ちゃんと先輩がそういうことになっても怒らないよ」

「……だ、だから、俺は」

「よくてきた義妹（いもうと）だからね」

麻衣の視線は、なぜか胸を射抜くばかりに強かった。

だがそれも、一瞬にして笑顔に覆われる。

「分かったよ。そん時はよろしくな」

麻衣の頭をぼんと撫でる。

「はーい」

いつも通りの気軽な返事。

気持ちがお楽になっていくのが分かる。

「さ、片付け完了っ！」

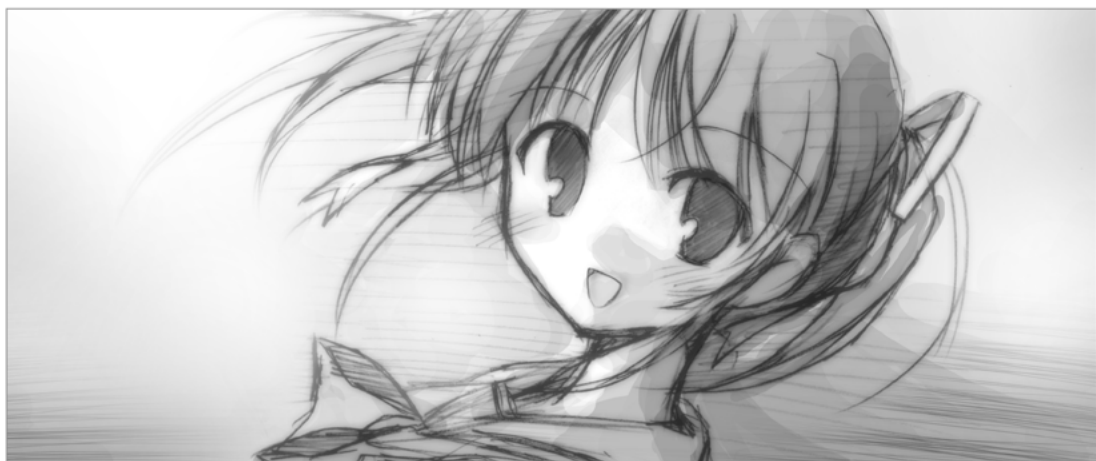
「ぱちり、」

とフルートのケースを閉じる音が聞こえた。

それは、なにかのスイッチが入る音に似て、

妙に耳の奥に残った。

終



榊原拓(以下榊):お仕事中かと思いますが、対談の時間です。
べっかんこう(以下べ):はばらばー
榊:はばらばつばらー
べ:ふむ。そんじゃ、「今年もそろそろ終わりですが、今年一年振り返ってみてどうでしたか?」
榊:大変な一年間でした。特に「夜明け前より瑠璃色な」のマスターアツツまでは。
べ:まあ今年はほとんど「夜明け〜」の開発でしたからね。なんだかあつという間でした。
榊:さて、とりあえず、私は体力づくりのためにジョギングしようかと思っています。
べ:テスクワークですからね。次回作に向けて健康を保っておかないと。……最近は野菜ジュースをよく飲んでますよ。
榊:あ、僕も飲むようになりました。まとめ買いして一日一本。
べ:なんとなく健康になった気がするのがいいですね。
榊:病は気から。健康も気から。私もサプリメントを飲んでいますが、これもその類です。しっかり食べてる時間が無いので。
べ:本当は自炊でできれば良いんですけどね。最近うちで作った料理は……鍋?
榊:鍋は野菜も沢山取れるし、体にも良さそうです。あと、この前は餃子作ってたじゃないですか。
べ:そうそう。餃子作りましたねー。
榊:あの時の餃子は作りすぎです(笑) 私も食べ尽くすお手伝いをしました。
べ:その辺の分量が適当なあたり、普段あんまり料理作ってない感じですね。その節はお世話になりました。
榊:いえいえこちらこそ。……でも、私は最近すっかり自炊していません。
べ:外食はばかりですよ。僕もそうですが。……そうそう。今度はハンバーグを作ろうかと思っています。
榊:いいですねえ。また作りすぎて下さい(笑)
べ:なんかこねるのが楽しそう。べっかんべっかん。
榊:……とところで抱負は。
べ:とりあえず健康な生活とか。
榊:健康生活、いいですね。ああそうだ。私は虫歯を治します。
べ:僕はハンバーグを作ります。
榊:それが抱負かよ!
べ:……ええと、趣味の方では何かないですか?
榊:とりあえず、積んである本を読みたいです。多分それより早いペースで買っちゃいそうですが。
べ:ふむ、最近小説を読んでないなあ。
榊:私もです。
べ:電車に乗らないと本読まないんですよ。来年は小説をたくさん読もうと思います。
榊:同じく、つて言うかととりあえず、読みかけて止まってる「カラマーソフの兄妹」を読み終えないと。
べ:兄妹?
榊:きょうだいで兄妹って変換される辞書を使ってます。(注:今回の対談は、開発室内でメッセージャーを使って行われました)
べ:そっちのが使うからね。ロシア文学が突然萌え文学じ。
榊:カラマーソフは男ばかりの三人兄弟。末っ子が教会の坊さんでちょっとかわいいんですが、これは妹にすべきだったと思います。
べ:シスターさんだ。
榊:あと登場人物ウオツカ飲みすぎ。……で、それにかけて、来年はお酒を少し減らすという抱負を。健康のためじ。
べ:がんばれ。
榊:他人事ちゃいまつせ。
べ:……お互い頑張りましょう。

スナップ対談 第12回 べっかんこう & 榊原拓



POSTSCRIPT

ハンドブックを最後までお読み頂き、ありがとうございました。『夜明け前より瑠璃色な』も無事発売され、12月22日には通常版も店頭に並びました。対談などを見ても、多かれ少なかれスタッフも肩の荷が下りたのがお分かり頂けるかと思います。

さて、この後の『夜明け前より瑠璃色な』ですが、まずは1月下旬の音楽集「Lunar Passport」発売、その後はビジュアルファンブックのリリースが予定されています。さらにその後にも、いろいろと展開が待っているのですが……詳しくは、確定次第OHPもしくは雑誌等で公開致しますので、もう少々お待ち下さい。

以前にも同じことを書いた気もしますが、こうして色々二次制作物を公表できることは、メーカーとして、

キャラクターたちの生みの親として、大変恵まれたことと思っています。同時に、不完全なものを世に出すことの無いよう、責任を負う立場であることも自覚しております。

もちろん、次回作の構想も同時に練って行きますので、こちらもどうぞお楽しみに。

まだまだ成長を続けるオーガスト。
これからも、どうぞよろしくお願い致します。

2005年12月末 オーガスト

奥付

オーガストオフィシャルハンドブック2006年新春号

発行・オーガスト

発行日・2005年12月末

<http://august-soft.com/>





Brighter than dawning blue.

オーガストオフィシャルハンドブック
2006年新春号



Copyright 2005-2006 AUGUST All Rights Reserved.